

それは、自ら望んだことなのか。それとも、否応なく
巻き込まれたのか。

もうわからない。わからなくていい。

ひとつだけはつきりしているのは、彼女の口からあの
言葉がこぼれ、僕はその言葉に望んで囚われた。

それは私自身が強く望んだこと。

そうだったのだろうか。

彼がそう望んでいることがわかったから。

だから、彼の望みどおりにしようと……そう思ったのだ
ろうか？

わからない。

自分は何がしたかったのか。

それでも確かなことは。

自分八

彼ヲ

彼女ヲ

アイシテル

10時。

ジョーの部屋のドアが力強くノックされた。

中からの反応はない。

ジェロニモはもう一度ドアを叩いてみた。しばらく様
子をつかがつても、ジョーが起きだしてくる気配は
やはりない。

「ジョー、いないのか？」

声をかけながら軽くドアノブに触れてみて、それがあ
つさり回ることにジェロニモは驚いた。ためらいながら
もそつとドアを開けて部屋の主の所在を探ってみる。

部屋の中は朝の日差しで明るい。少しの隙間からでも
ベッドの位置は確認できた。

ジョーは窓に背を向けて、毛布を口元まで引き上げて
うつ伏せるように眠っていた。

多少のことで起きる気配はない。

もう一度、壊さない程度に強くドアをノックしてみた。
ジョーが嫌そつに毛布にもぐりこんだのを見て、ジェロ
ニモはあきらめた。

「ジョー、悪い。入るぞ」

ドアを大きく開けて部屋の中へ入ると、ベッドのジョ
ーへつかつかと近づいて毛布に手をかけた。

ジョーは突然強く揺り起こされて目を開けた。いつも
とはあきらかに違う状況に、一体何が自分の身に起こつ
たのか、しばらく頭が混乱する。

「……ん？」

もぞもぞと毛布から顔を出して、そこにあつた意外な
顔をたつぷり30秒見つめてからやつと声が出た。

「……ジェロニモ？」

「悪い、ドアが開いていた。博士が手助けを欲しがつ
てる。すぐ研究室へ来てくれ」

「わかった」

「大丈夫か？」

「何が」

「起きてるか？」

「ん？」

のろのろと身体を起こすジョーをあきれたように見て、
ジェロニモは手近なところに置いてあつたタオルを手渡
した。

「まだ寝てるだろう？ 顔を洗ってから来い」

「もちろん。起こしてくれてありがとう」

男同士だからとジョーはその場でパジャマを脱ぎだし、
着替えを始めた。

「博士の用って何？」

「遅れていた研究資料がやっと届いた。荷解きは終わ